

金沢大学サテライト・プラザ ミニ講演

日 時 平成18年12月16日(土) 午後2時～3時30分

場 所 金沢大学サテライト・プラザ講義室

演 題 「731 部隊と金沢」

講 師 古畑 徹 (金沢大学文学部 教授)

はじめに

本来の私の専門は7～10世紀の東アジアの国際関係・国際交流史で、今から1000年も前のことをやっているわけです。ただ、私がやっているところは渤海国といって、当時中国の東北地方にあった国です。要するに中国東北部、旧満州地域です。私個人としては、その時代だけではなく、この地域の歴史を通史的に見たいと思い、いろいろ新しいところまで勉強してきました。そんな中で1993年に「いしかわ731部隊展」という展覧会があったわけです。そのときに実行委員になり、そこでだいぶ勉強させていただいたという経緯があります。

さらに金沢大学は1999年をもちまして誕生50年で、それに合わせて『金沢大学五十年史』というものを発行いたしました。この編纂に加わったときに、編集委員長はこの大学の理事をしています橋本先生だったのですが、橋本先生が私に、戦時体制下の前身学校、要するに四校や金沢医科大をやれと言うわけです。そんなのは私の専門ではないので嫌だと言ったら、「おまえは731部隊展をやったから少し詳しいだろう。事実が出たら載せるからやれ」というわけです。事実が出たら載せるとはっきりと行ってくれましたので、そういう話ならば、ということで、私自身も興味がありましたのでやらせていただきました。実際に医学部の倉庫で調査できましたので、あれこれ見ているうちに今まで知られていない史料を見つけることができました。今日、これからお話するのはその話です。731部隊の石井四郎部隊長が金沢へやってきて金沢医大で講義をしたという、それに関連する史料です。

また、731部隊のことを知っている方ならだれでも知っておられますけれども、石川太刀雄、石川太刀雄丸と呼ぶこともあります。太刀雄丸というのは本人の弁によると戸籍係の間違いで「丸」がついたのだそうです。本人としては太刀雄なのだと言っておられたと聞いています。この方は金沢医科大の教授になられ、そのあと引き続き金沢大学医学部

の教授になりました。この方が 731 部隊で非常に重要な役割を果たしたということはよく知られています。その方が金沢医科大に赴任した経緯が分かる史料が出てきたのです。

この辺の話はほかの本などにほとんど載っていません。これらを紹介して、当時の大学と軍部のつながりを少し見てみようと思います。ただ、今言いました五十年史の通史編にすでにあらかた書いていますし、実は「七三一部隊長・石井四郎の日本文化講義」という形で論文も 1 本発表していますが、まだ完全に史料を全部使いきって書いていませんので、どこにも出していないようなものも少しあります。

731 部隊とは

731 部隊とはということで、簡単にお話しします。そこに載せてありますのは、『角川世界史辞典』というコンパクトな世界史の辞典です。日本史の辞典に載っているのは当たり前ですが、今や世界史辞典にも載っています。731 部隊というのは、「日本陸軍の細菌戦部隊」。細菌戦、生物兵器を使う部隊です。「関東軍防疫給水部の秘匿名」。本当の名前は関東軍防疫給水部ということになりますが、その暗号名とでもいいでしょう。「1932 年関東軍防疫班として発足、中国人政治犯など約 3000 名を人体実験で使い細菌兵器を開発、40 年以降中国戦線でペスト菌などの細菌戦を実施した」。実際に実施したということが分かっています。今、この実施関係で裁判も起こっています。「開発した生物兵器と人体実験の情報は、戦後アメリカに受け継がれた」。実はアメリカがこの情報を持ってしまったのです。

実はかつて 731 部隊を教科書に載せようとして検定で削られたことがあります。それは有名な家永三郎氏の教科書裁判の中の一つで、これも一つ争点になりました。実はこの件については勝ったわけです。その過程でいろいろなやり取りが出てきて、731 部隊の姿が相当はっきりしたのです。そのときの裁判のやり取りをまとめた本もできています。その中ではっきりと事実としての確定があって、今、高校の教科書にも割と普通に載っています。若干いろいろと教科書に対してクレームがつくこともあって、日本軍のやった行為については少し削られている傾向がありますが、731 部隊は比較的、1 回載せたものを削るというケースは少ないようです。

もう少し詳しく説明したいと思います。初代の部隊長は石井四郎という人で、この人は旧制四校の理科乙類を大正 5 年(1916 年)に卒業しています。もともとは千葉出身の人で、金沢の四校で学びました。理科乙類というのは医学の方向へ進もうという学生が主に入る

ところでは。そのあと京大医学部を出て軍医になった人です。

毒ガスや細菌兵器は第一次世界大戦で使われ、これは非常に問題であるということで、実は1925年に世界的にそれを禁止するというジュネーブ議定書ができます。ということは、731部隊のような部隊を作る前に、使ってはいけない兵器と決められていたわけです。日本はまだそういうものの開発や研究はしていませんでした。ところが28年から30年にかけて石井四郎がヨーロッパへ視察に行きます。そこでこういう兵器の対策のための研究が進められていて、細菌兵器は威力があるということを知り、帰国後に軍の上層部に働きかけ、細菌兵器を秘密裏に開発しようと言いつつ出かけたわけです。

それが具体的な形で準備室になるのが1930年、陸軍軍医学校です。東京新宿区の戸山にあった軍医学校の中に、石井をトップに防疫研究室が作られます。これが細菌兵器を作る中心になっていく研究室です。そこには石井のつながりのある人を中心に、大学教授などの嘱託研究者が集められ、そこに対してお金を払ったりして研究を援助しながら、逆にいろいろなアイデアをもらうという関係を作っていくわけです。

やがて人体実験を行うようになっていきますが、これを東京でやるわけにはいきませんので、当時占領していた満州でやろうということで、1932年に東郷部隊という軍医中心の部隊ができ上がり、それが行きます。ただ、この東郷部隊はいろいろ準備をしている過程で捕虜に逃げられて大騒ぎになるという事件が起こり、いったん中止になりますが、1936年に場所をハルビン郊外の平房というところに変えて、関東軍防疫給水部ができます。ここには今度は軍医ではなく、陸軍技師という形で民間の若手研究者を集めます。それらは皆、嘱託研究者である、先ほどの大学教授のお弟子さんになります。彼らを中心に関東軍の防疫給水部ができ上がります。これが731部隊なのです。

こうしていよいよ本格的に人体実験を行いながら、細菌兵器や毒ガス兵器が作られていきます。同時に、それらを行う大規模なネットワークが1942年ごろまでにでき上がります。当時陸軍内部ではこれを石井機関と呼んでいたそうです。そして当時731部隊等では、そういう人体実験に使われて殺されてしまった人たちのことを「マルタ」と呼んでいたそうです。丸太棒の「マルタ」ですから1本、2本と数えたといわれています。

実はこの大学教授、嘱託研究者、民間研究者の中に金沢の関係者がいます。石井機関というのは陸軍の防疫研究室を中心に置いて、軍のネットワークと民間のネットワークを防疫研究室がつなぐ仕掛けになっています。民間のネットワークのほうには、軍医学校の嘱託研究員の形で、有力な教授が何人も名前を連ねました。その中で金沢の関係者としては

京大医学部長の戸田正三で、後の金大の初代学長です。常石敬一先生の研究によると、その後も戸田正三氏は731部隊が表に出るのをいろいろな場所で阻止する役割を果たしたと言われています。また、金沢医科大の教授だった谷友次という方が入っています。金沢医科大で入っているのはこの方一人です。

一方、731部隊等へ送り出された若手研究者のほうで金沢に関係するのは石川太刀雄という人です。この方は京大から行き、731部隊にいて、そのあと1943年に金沢医科大に移ります。それから二木秀雄という人がいますが、これは谷友次の弟子になります。彼が金沢医大から一人入っています。最初からいた若手研究者で、中核になった一人です。金沢にかかわるのはこの二人で、731部隊の本を読むと必ず出てくる有名な人たちです。

こちらでは、先ほど言ったように細菌兵器や毒ガスなどの開発が行われます。人体実験を行ってデータを獲得していく。データを取るために病理解剖なども行われます。また、兵器とは別に、軍事にかかわるものとして結核や梅毒などの研究も行いました。実は病理解剖は石川の仕事で、結核や梅毒研究は二木の仕事でした。

結核に関しては、子どもを使った実験が行われたことが何人もの証言で分かっています。それを行ったということもあって、二木については悪口を言う仲間がけっこう多いと聞いています。本当にそうなのか分かりませんが、そのように史料には残っています。

実はそれだけではありません。人体実験で行われたものの中には、有力教授のほうは軍のために単にアイデアを提供しただけではなく、自分の研究のための人体実験のアイデアも送っていたといわれています。これも常石先生の研究成果で、その実験を実際に行って、データをこちらに送り返すということも行われていたと。そのために、軍のネットワークのこちら側は、日本医学界の人体実験場だったという言い方も常石先生はされています。

その辺の細かなことは今日ご紹介しきれませんので、もし興味があれば常石さんが『医学者たちの組織犯罪』という本を書かれていますので、それを見ていただくといいと思います。このほか、常石先生は講談社の新書にも731部隊について書かれていますので、ごらんいただけたらと思います。

戦後に行きますが、戦後でもまた金沢が出てくるのです。1945年8月11日、敗戦の日である8月15日より前に撤退するのです。ソ連が参戦したので敗戦になることはほぼ間違いないと察知し、捕まってしまうたら、これは国際条約違反ですから大ごとなので、証拠隠滅するために部隊に秘匿命令を出して撤退します。平房の部隊の場所は爆弾を仕掛けて破壊しましたが、建物自体は残ってしまい、今は罪証陳列館という形で残っています。

本部はうまく撤退できましたが、支部がソ連に捕まり、その捕虜の証言によっていろいろなことが明らかになってきます。

本部の逃げた先は、実は金沢なのです。金沢の北のほうの小坂町に野間神社という神社がありますが、その境内というか、坂の下のところだと宮司さんは言われていました。93年の部隊展のときに宮司さんに話を伺いに行ったことがあり、坂の下の駐車場になっているところにテントを張っておられたと聞いています。来たときには、とにかく引き揚げ部隊なので行くところがないから貸してくれというので貸したと。ところがテントの中にはなかなか手に入らない缶詰やいろいろな物資がある。おまけに軍服をミシンで仕立て直し、背広に変えて町へ出ていく。これは気持ちが悪くというので、氏子の方などもいろいろと言って、結局お祭りを口実に出ていってくれと言ったら、どうも仕事のほうが終わったようで、その人たちは出ていかれたと聞いています。話によると、1か月滞在して、大体事務的な後始末をしたので、東京へ移動したということのようです。

そのあと、この部隊のことは細菌戦部隊として、実は連合軍は知っていました。アメリカ軍は最初からそのデータを手に入れようということで接触を図り、最終的には戦犯訴追しないということでデータを手に入れるという取引をします。しかし、その段階で人体実験をしたということをアメリカ側は知らなかったのです。ところがソ連が人体実験しているということをつまえた捕虜から知ります。その結果、ソ連はアメリカ側に、「おまえはデータを持っていったらう。おれも欲しい。そうでないと人体実験のことをばらすぞ」と言ったのです。

アメリカ側が慌てて調べ直したところ、人体実験をしたという確証を手に入れます。そして今度は、これも手に入れ、ソ連には一切渡さない。事実秘匿、隠匿ということで、ソ連側から検事が来たりしてもうまくかばって、結局事実関係を明らかにさせない。ソ連側は自分の思うようにならなかったもので、そうならということで、人体実験したことをばらしました。こういう政治的なやり取りがあったことはよく知られています。

その過程の中で、実はまた金沢が出てくるのです。1947年、石川太刀雄は、要するに人体実験をしたときの病理標本、病理解剖した細胞などを小さなプレパラートの上などに載せて標本化したものだと聞いていますが、そういうものを大量に隠し持っていて、それを金沢で押収します。金沢医大で押収したと聞いていますが、これに関する史料は大学からは見つかりませんでした。押収されただけではなく、石川は押収された病理標本についてのデータの解説を作りました。石川レポートといわれ、現在も一部がアメリカのタグウェ

イ実験場というところに現存しているそうで、それも先ほどご紹介した常石先生の本の中に出てきます。今は請求すれば見られるものだそうです。

この件については調査の過程では分かりませんでした。1947年の金沢医大、今の金沢大学医学部の前身ですが、その教授会記録が、この1年間ないのです。この1年間だけ現存せず、散逸してしまっているのです。戦後のどさくさのときですので史料があまり残っていないということもありますが、教授会資料ならば、場合によっては米軍が入ってきたりすれば何か残っている可能性があると思いましたが、残念なことに教授会の議事録自体が残っていなかったのです。これについては細かなことまではよく分かりません。

その後、石川もそうですが、医学者だった隊員たちは医学界の有力者の庇護のもとで大学に残り、有力者になる人たちもたくさんいます。また、先ほど出てきた二木秀雄も絡んでいます。ミドリ十字という製薬会社がありましたね。例のエイズの件で今やつぶれてしまったわけですが、あの会社を建てたのも、実は731部隊の人たちでした。そういう形である程度社会的な地位も得て残っていったのです。

一方、医者ではなかった下働きをしていた下級隊員は、秘匿命令等を守ったりする中で非常に苦勞したといわれています。実は金沢にも証言される方がおられて、話を伺ったこともあります。けっこう大変だったようです。大体証言する方は下級隊員の方です。それより上の方で証言される方はほとんどいません。概略はこんな感じです。いろいろ本が出ていますので、また見ていただければと思います。

石井四郎の日本文化講義

(1) 日本文化講義とは

ここから新しい史料についてお話しさせていただきたいと思います。まず、石井四郎が金沢医大で講義をしたというお話からご紹介したいと思います。日本文化講義というのは1936年から45年までの間、高等教育機関の学生生徒の思想対策として行われた特別講義です。36年以前はどちらかというと左翼系の学生が多かったので、左翼思想をつぶして国家主義的な思想を注入しなければいけないという考え方が出てくるわけです。特に高等教育機関においてそういうのがはびこっているのを何とかしなければいけないということで考え出されたのがこの講義なのです。つまり帝大、官立大学、金沢医大というのはこの官立大学です。旧制高校などは直轄学校です。旧制の四校もそうですし、工学部の前身である金沢工業高等専門学校もそうです。要するに官のほうで経営している高等教育機関に対

して、文部省の統制のもと、思想対策のための講義として実施されたものなのです。これを担当しているところは思想局です。後に教学局と名前を変えますが、そこが担当します。

実際に講義が毎週あるわけではなく、単発で行われる講義です。担当者は日本の国体・日本精神というものの真義を明らかにできる人というのが条件で、大学と文部省が合議をして決定します。史料により、文部省からそのリストが配られたことが分かっています。そういうものを見ながら大学がこの人をお願いしたいと決めていくのです。

当初、直轄学校は年5回、官立大学は4回、帝大は3回、毎回2時間で必修科目に準ずる。要するに必修科目で単位を与えるわけではないけれども、必ず出てこいということです。若干、事情があつて出られない場合はしかたがないけれども、基本的には学生は出てきて聞けという扱いです。講義の終了後には、講義の名前、演題、講義の要旨、聴講学生や生徒の数、出席率、講義が学生や生徒に与えた影響などを思想局あてに大学は報告しなければいけないことになっており、しっかりした報告書が作られていました。

これは37年から本格的に実施され、その後回数が減少していきます。なかなかこれだけの回数をやれなくなってきたり、減っていきます。1944年には学徒動員が通年実施になり、だんだん学校へ来られなくなる。1944年には戦時教育令で実際にほとんど大学など来ないのですが、そういう状況でもこの講義だけはさせたのです。それだけ文部省がこれを重視していた。要するに高等教育における思想教育の中核と位置づけて、極めて重要視していた講義だということが分かっていただけだと思います。

ただ、これについては非常に史料がなくなっており、名古屋大学で八校のものが少し見つかると、ちょっと分かるようになってきました。金沢のほうでも今度見つかりましたので、日本文化講義についてはだいぶ詳しくいろいろなことが言えるようになりました。名古屋大学の人たちが研究した八校のものにより、日本文化講義というのは高等教育機関に軍国主義を浸透させていくうえで非常に重要な役割を果たした講義だと、教育学の専門家である安川寿之輔先生が総括しておられます。確かにそれくらい重要な意味を持ちましたが、現存史料は非常に少ないです。その中で金沢大学には、これが医学部に残っていたことで、日本文化講義の姿をかなり明瞭にすることができるようになります。今は医科大から資料館のほうに移っており、現存しています。その中で日本文化講義のことが書いてある書類というのは、「日本文化講義 自昭和十四年度至昭和十五年度」と「日本文化講義関係書類」という二つの簿冊です。「文化講義関係書類」は表紙がもう壊れて落ちてしまい、目次がいきなり頭に来るような状況になっています。

(2) 「日本文化講義関係書類」「文化講義関係書類」の分析

「日本文化講義関係書類」と「文化講義関係書類」を分析していくと、教育局指導部指導課というところから講師一覧が配布されます。そこには大学教授や政治家、官僚、経済人や軍人の名前がいろいろ載っています。要するに、こういう講義にふさわしい人ということ。その中には湯川秀樹もあるのです。やはり当時、物理学者としてすでに有名になっていましたので、多分彼の話聞かせることは日本の科学がいかに進んでいるか聞かせることになるということなのでしょう。彼は実際にどこかで講義しています。戦後は平和主義、核兵器廃絶などに動くわけですが、戦時中にはこういう経歴も実は存在しています。

こういうものと同時に、参考のために全国でどんな授業が行われたかという一覧も配布され、金沢では昭和15年までの史料が現存しています。参考資料として、五十年史を作る過程で確認できた日本文化講義の前身学校、四校だとか金沢医大だとか、金沢工業高等専門学校、石川師範や金沢高等師範でもやったことになっていますが、それらを一覧にしたものがあります。どこでだれが何をしたかというのはまだ全部分かっていませんが、金沢に関係するところではかなりデータを明らかにしました。かなり有名な方がぞろぞろいます。

実はこの指導課の講師一覧と実際に実施されたものを見比べていきますと、実際に行った人としては、実は文部省推薦者以外の人がかっこういるのです。どうしてそういう人たちの名前が挙がってくるのかいろいろ調べていくと、どうも学校が個人的なついでで独自に依頼する。要するに文部省にリストの人をいろいろ依頼しても、日程がうまく合わないことがあるのです。当初はOKだったけれども、忙しい人ばかりなので、都合がつかなくなって、どうも学校側でいろいろと独自に依頼しなければいけない。要するに回数が決められていますので、その回数はやらなければいけないのです。文部省に頼んだけど、頼んだとおりにいかない。そうしたら自分でやらなければいけないという話になり、学校側もだいぶ苦労したらしいのです。そういう事例の典型例が、実は石井四郎の日本文化講義です。これを追うだけで、学校側がなぜ個人的についでを頼らなければいけなくなったり、どのようにたどっていったのかという具体例が分かります。そういう意味で、教育史的にちょっと面白い例なのです。

石井の講義は昭和16年4月21日に行われました。これは最初に計画書を出さなければ

いけません。国から決められたことをやるわけですから、予算も出るわけですし、このような計画書に基づいて文部省へ申請して、それを出さなければいけないのです。16年4月1日付になっている16年度当初の計画書では、実は石井四郎がやることにはなっていないのです。青木保という東大教授の名前が挙がっていて、青木保教授に兵器の話とこののを第1学期にやってくれという要望が入っていて、その予定になっています。当初は多分これはOKだったのです。ところが5月1日付の計画書というのが残っており、青木保を石井四郎に差し替えています。ただ、講義が実施されたのは4月21日です。それなのに5月1日付で計画書が出ているというのはどういうことか。要するに書類上、計画にないものは実施できないので、後で差し替え計画書を作って出しているのです。

この中に、4月に実施済みとか、本学において交渉したということが明記されているわけですが、それと同時に、もう一つ面白いのは、予算書も実は3種存在しています。最初は青木保で出ていました。それは史料の中に載せていませんが、史料というのは、私が「七三一部隊長・石井四郎の日本文化講義」という論文を書いたときに、まとめて後ろに掲載したものです。最初は青木で予算書を作り、青木から石井に変わったので、石井で予算書を作りました。この予算書に関しては、青木の名前を石井に入れ替えるだけで予算書を作ったのです。ところが、実は石井は大学側がお金を持つ必要がなく、陸軍の側で石井の派遣費用を持ってくれたのです。その関係で、石井の派遣に関しては予算がかからないことになり、その部分がただという形の書類がもう一つ作られています。それで3種類です。こういうものによっても、事務というのがどのように動くのかということがよく分かりません。

次は4月18日付の文部省の教学局部長からの電文です。これは実は史料の中に載っていません。というのは、その論文を書いたときには石井四郎の名前は直接なかったのですが、史料には載せていませんでしたが、「青木保の出講不能につき、代わりの講師を何とか」という電文になっているのです。実は講師までは分かりますが、そのあとの電文が暗号になっていて、私も読めません。大学側もどうも読めなかったようで、電文のわきに暗号を読み解いて文字化されていますが、それにも講師のところはクエスチョンがついており、読めなかったようです。ですので、ここはよく分かりません。実はその上に張り紙がされており、表書きには「至急回答されたし」と書いてあります。私の推定では、この電文で文部省の側が、青木は都合が悪いから、代わりの講師をすぐに連絡してよこせという中身だったのだろうと一応考えていますが、まだよく分かりません。もう一度点検し直す必要

があります。

ただ、18日に青木の出講不能を伝えて、21日に石井に代えて講義などということはちょっと考え難いですね。実際に追いかけていくと、実は青木の出講不能の連絡は、多分18日より前にあったと思われます。それを受けて18日より前から石井と金沢医大の間の接触があります。まず、こういう電文がありました。4月16日付の二木秀雄より谷友次あての電文です。これは史料5で載っているもので、「タニトモシ ナイタクヲエタガ アスカク テイスル ニーヒツクヨテイ フタキ」と書いてあるのです。要するに16日の電文で石井に内諾を得たということを二木が言っている。しかし確定は17日だと言っていて、21日にはちゃんと着く予定だという連絡なのです。ということは、16日には石井との交渉で石井の内諾が出ていますから、それより前に、これは二木が谷に言っているわけですから、谷が大学側の代表として石井に対して交渉を行う。その交渉についても、自分の弟子であった二木を仲介に置いて交渉したということだと思います。

本来なら、実はこういう講義に関しては学生課長の管轄なのです。通常は学生課長が多分だれか先生に頼んでお願いしているのですが、文部省に頼んだ人は来られなくなってしまった、でもやらなければいけない。それで、だれか頼むということで、多分学生課長がどこかの先生にお願いした。すると谷がいいよと言ったのでしょう。実は谷は石井四郎と四校の同級生です。谷は大学は東大ですが、四校では石井と同級で、大正5年に一緒に卒業しています。彼と旧知の仲なのです。それが多分、谷が石井の開いていた陸軍の防疫研究室の嘱託研究員になった理由だと思います。谷が直接石井に連絡を取ればよさそうなものですが、多分、石井をつかまえるのは簡単ではないのでしょう。それで、恐らく自分の弟子の二木へまず連絡した。731部隊へ送った彼に連絡を取り、それを介して石井というように交渉が行われた。16日以前にそれがあって、16日に内諾が出たということで連絡が入ったと。17日に確定するといいますが、恐らく日程調整の必要があったのだと思います。忙しい人間はどうしてもすぐ回答というわけにはいきませんので、多分そういうことだろうと思います。

21日にやるという雰囲気が出たわけですが、それに関連するもう一つ面白いメモが出てきました。ここに2枚のメモ書きがあります。史料7という形で載っていますが、非常に分かりにくいのです。本当にメモ書きなので字が全部読めなくて、分からないところがけっこうあります。それは光島という当時の金沢医科大の学生課長の判が上のほうについていまして、多分光島さんのメモだと思いますが、「石井少将招へイノ件」と書かれています。

石井招聘の件について、恐らく二木秀雄からの指示が電話なりであって、こういうメモを作ったものと考えられますが、これについては二木あての返信の電文が残っているので、大体そういう推定をしています。

それはそれとして、実はこの中に幾つか大事なことが書かれています。それは陸軍の軍医学校長あてに石井を派遣することを依頼してくれということがまずメモ書きにあります。また、到着時刻は21日の7時26分、京都から来るとのことです。その前に石井は京都にいて、京都から金沢へ向かった。7時26分に着きますから夜行列車ですね。それから石井だけではなく、将校とか技師とかいろいろな人がついてくると。また、講演は21日の午後か22日にやるということも書かれています。さらに、金沢師団の軍医部ということは第9師団ですね。9師団の軍医部にも見せたいという意向を石井の側から言っている、その辺のことがひととおりで分かります。

これを受けて医科大では、軍医学校長あての電信案というのを作りました。電信そのものは残されないわけです。電信を打つための下書きが書類で残っており、それが史料9として載せてありますが、4月17日付です。ですから16日に二木から来て、17日に確定すると言われました。多分、先ほどのメモは17日中に来たのでしょう。その指示を受けて電信案を急いで作ったのだと思います。

石井を送ってくれというのですが、このときになぜ軍医学校長あてに電信を出しているかということ、石井を軍医学校の教官として扱っているからなのです。彼の肩書きは陸軍軍医少将と同時に、陸軍軍医学校教官という肩書きで実はこの講義をしているのです。ですので、軍医学校から派遣されてくる。だからこそ無料という形になっているわけですが、その手続き上、こういうものが必要になってくるということだったわけです。

それと同時に教学局のほうへも許可を得なければいけません。確定しましたから。そのための電文というのがあり、これも電文案が残されています。ただし日付が残っていないのでいつかはよく分かりませんが、多分18日ぐらいだと思います。許可回答を至急電信でくれという要請を実は最後に書いてありますが、石井に代わったからよこせということが書かれています。先の文部省からの電文というのは、もしかしたらこれへの回答かもしれません。実は論文では、先に文部省のほうから電信が来て、回答をよこせと言われて、それに対してこういう回答を送ったのかなと思っていましたが、よく考えてみると、実はこの電文案には、文部省にこのように代えたから回答してほしいと書いてあり、そこからすると、この電文を送ったのに対して、先ほど見てもらった電文が来たのかもしれない。

1回論文に書いたにもかかわらず、今になってちょっと不安になっています。もう一度よく考えなければいけません。とにかくそれでどうも回答になったようで、18日付の文部省あての講師変更許可の、電文だけではなくてきちんとした文書としての書類も送らなければいけないらしく、その文案も史料で残されています。文書行政がどう進行しているか分かるものです。

さらに、石井の要請を受けていますから、光島学生課長が9師団の軍医部長あてに、こういう講義をやりますという通知をしています。二木の指示を受けたのですが、その中にどこに泊まるか決めてあります。宮保旅館、今は駐車場になっていますが、柿木畠にあった旅館です。これは多分大学側で用意したのだと思います。そこへ泊まるときのタクシー代などもメモが残されています。それから日程などもだいぶ分かってきて通知されています。それらはどうも軍医部が石井と会いたいだろうという配慮をして、細かな日程を教えているという文書のようなのです。石井側が聞かせたいと言っていることとかかわらせて、大学側がだいぶ配慮したことが分かります。

さらにもう一つ変わった電文があります。これは史料10になっていますが、4月20日付で京都のハヤカワという人物、まだこの人間を確認していませんが、当時、多分石井のそばにいた人で、このとき同行した人間だと思います。その人から、金沢医大の谷友次気付で二木あての電信が来ています。これが非常に注意を要するのです。細かいことがいろいろ書いてあり、読んでもらうと面白いのですが、どうも石井の乗る切符は何とかなったけれども、ほかが取れなくて、いろいろ力づくで、軍隊の権威とか大学の権威を使って切符を取ろうとしているということが書いてあります。

とにかく、どうも京都に石井が来ている。それは先ほどの経緯からも分かり、そこに連れてきた人間がいますが、そのときに、二木あての電信が谷気付で来ているということです。すでに二木は20日の段階で金沢に来ている。それをもう向こうも知っているわけです。実はそれ以前には、陸軍軍医学校にいたということが史料8で分かっています。このことで何が言えるのかというと、実は石井四郎は飛行機を使って旧満州の731部隊と日本の軍医学校との間をしょっちゅう行ったり来たりしていたといわれていますが、部隊員に関しては、満州で研究していたと普通よくいわれるのです。ところが、これを見ると、どうも石井だけでなく731部隊の主要部隊員というのは、満州と、日本の軍医学校や、あるいは、金沢医科大は二木の母校ですね、そういうところと何回も行き来していた可能性があるのです。単に石井一人が行ったり来たりしているわけではなく、いろいろなつながりの関係で、

彼らも行動しているのではないかということなのです。これもほかの史料が出てくると面白いと思いますが、それをちょっと思わせる貴重な史料です。彼らの活動の在り方を一つ物語ってくれ、母校との関係の密接さをある程度示してくれるものだと思います。

そして実際に日本文化講義が行われました。4月21日の午後1時から5時です。本来は2時間なのですが、石井は4時間やったそうです。史料15にきちっと要旨の全文を載せておきました。とにかく終わったあと、文部省に報告を出さなければいけませんので、最終的にはタイプ打ちになりますが、これはその前のペンで書いた下書きです。ですから、問題のある箇所には棒線が引かれたりもしています。演題は「大陸ニ於ケル防疫ニ就テ」。要するに、当時中国戦線、満州国は占領し、日中戦争が行われています。そこにおける疫病防止の状況についてという報告なのです。この演題は直前まで発表されていません。多分当日、石井が来てからの発表だと思います。

講義内容ですが、彼はまず活動写真を使っています。実際に随員として活動写真の技師が3名ついています。技師がいて、映画を映したわけです。それを使ったうえで、満州、南支（南中国）、中支（揚子江の一带）の防疫状況を解説するというのが、まず話のスタートです。そこから国際情勢、要するに時局の解説へと展開していきます。その中で実はノモンハン戦の戦いに触れたのです。写真では、ここにノモンハン戦というのが書かれています。書かれているだけでなく、上から棒線が引かれて消されているのです。つまり、ノモンハン戦は当時秘密事項なので、しゃべったら本当はまずい話なのです。記録上残ってはいけないので、多分消されたのだと思います。写真ではよく見えませんが、現物を見ると細く棒線で削られています。それにも触れて話をしたようで、削除の線を引いていて、当然タイプ打ちのほうではなくなっています。

さらに現代の戦いというのは国家総力戦、国家のすべての力を出す、そして持久戦なのだということを説き始めます。だから人的資源が優良なほうが強いのだ、それが最も重要なのだと言うわけです。そこから医学界へと話を展開し、医学界においては人の質をよくすることが強兵につながるのです。そういう研究が大事だという話なのです。病気の予防、治療、防寒や防熱の研究が軍事に役立つ。そういうものは医学の重大使命だ。だから学生諸君は、この時局に当たっての国家の使命、重大責任を負っているのだということをよく理解して研鑽に励みなさいという話をしていくわけです。

これについては、ちゃんと出席率を調べていて、金沢医科大学の大学生は84%が出席です。また薬専生、これは薬学専門学校というのが金沢医科大学に附属されていて、今の薬学部で

す。これが94%です。それから医専とって、医学部ではなく専門学校の形で医学の技術だけ、要するにそれだけの高度な学問を習得しないで、とにかく医者として使える人を育てるために医専というのが置かれていましたが、そこでは97%が参加したのです。大学生になるほど出席率が悪いわけですが、ほかに比べると実はこの数字は低いのです。先ほど言いましたように準必修です。大概の場合は大学生でも90%を超え、医専だと95%を超えます。薬専だとほぼ100%になるのです。恐らく今の経緯から見てくると、ものすごく急だったと思います。特に21日というのは月曜日、その前の20日が日曜日で、宣伝や連絡の関係で全体に十分に行き渡らない。それから大学生あたりだと、手伝いでいろいろなところへ出かけていることもあります。そういうのを呼び戻したりすることもできなかったのだらうと思います。とにかく他に比べて非常に低い数値なのです。

それに加えてさらに注目に値することは、台湾・朝鮮・中国の出身者、要するに台湾人、朝鮮人、中国人は出席が認められていないのです。この報告書にはそういうことは細かく書いていませんが、史料14には、「台鮮支」の人たちについての別枠の数字がついており、これを差引総数で削ったうえで母数を出して出席率を出していることが分かります。さらに、だれが出席して、だれが欠席したかが、本当は全部分かります。その帳簿も残っているのです。出席した人は○、出席しなかった人間には×がついていて、カウントしない予定でいた台湾とか朝鮮とか中国の出身者に関しては最初から棒線が引かれているのです。それを見てもう明らかに、最初から外していたことが分かります。問題は理由で、これが正直言うと不明なのです。推測は幾つかありますが、後ほどまたお話ししたいと思いますので、不明だということ覚えておいてください。

さらに9師団の軍医部が出席しています。このような人たちだけでも数百人いるわけで、それに軍医部その他でさらに200人追加でいたと書かれています。最後に上がった報告の感想等では非常に好評であったと一応書かれています。大体どの授業も不評だったと書いてあることはあまりないので、これをそのまま信用していいかどうかよく分かりません。ただ、ほかのと読み比べると、かなりの熱弁であって、人々が引き込まれたらしい節は読み取れるように思います。ほかよりもちょっと書き方が、迫力があつたように書かれている感じはしますが、果たして本当にそう取っていいかどうかは、書類のことなので、ペンディングにしながら考えたいと思っています。

さらにそれでは終わらず、帰ったあと礼状を出しているのです。石井あての礼状と、二木が仲介したので二木あての礼状というのがあります。また、軍医学校長あての礼状もあ

ります。そのあと、石井から返電も来ています。二木あての礼状の中には、医科大などでお願いしたときに、講師の方にはいつも揮毫をしてもらっているのですが、二木を仲介にして、石井四郎の揮毫がもらえないかということが書かれています。書いて送ったかどうかは知りませんが、送られていたら、もしかしたら届いていたのかもしれない。

実は二木あての電文には注目すべきこととして、「ハルビン満州七三一部隊」あてと明記されているのです。ここが何をしていたかということまで知っていたかどうかは知りませんが、ハルビン 731 部隊という言葉が医学者の間では普通に使われていたことを何より示してくれると思っています。活動内容を知っていたかどうかはちょっと別だと思いますが、医学界自体はその存在を周知し、何か特殊な医者部隊があり、こういう呼び方をされていたということが了解されていた事項だということをお話しています。

以上が文化講義の状況です。石井が、少なくとも4月に京都から金沢へ行って、また京都へ戻って、実はさらに5月の頭にはもう満州に帰っているということが分かるわけで、いかに飛び歩いているか、よく分かります。二木もそのあと満州に戻っていることが分かるわけで、彼らの行動力がよく分かる状況にもなっています。

石川太刀雄の金沢医大赴任

今度は石川太刀雄の金沢医大赴任の話へ行きたいと思います。これは金沢医科大の教授会資料が医学部の倉庫に残っていました。これを調べてみると、石川太刀雄が金沢医科大に赴任したときの状況が分かります。当時の医科大を取り巻くというか、大学を取り巻く状況、科学動員の状況がよく分かるので、少しご紹介したいと思います。

事の発端は、1942年から43年にかけて病理学第2講座にいた杉山繁輝教授という方が、実は京大の教授を兼任していたのです。昔はそういうことができたのです。彼が京大の専任になるために自分の後任者を探すという話があって、これが42年から43年に起こります。石川は病理学第2講座の後任になります。杉山は京大の教授を兼任していて、京大で731部隊ともかかわりのある清野という教授のお弟子さんなので、京大の事情に非常に詳しいわけです。彼は1942年10月19日の金沢医科大の教授会で、京大医学部が軍部と手を結んで発展した、非常に密接にやっとうまくやっている、うちの大学ももっとつながってやっっていかなければいけないという提案をします。軍部の意向をよく了解して、察知して、もっとうまくやらないと発展できないということを主張しています。彼の提起を受けて、そういう検討会のようなものを作ろうとしますが、途中で沙汰済みになってしまいます。

そういう杉山ですが、その後任探しの最初の話として、1942年1月の教授会で杉山の後任者で石川の名前が挙がってきます。彼は非常にいいというのですが、そのときに、彼について難しいのではないかという意見が教授会で出ます。彼は「石井部隊に居らるる」ために軍の承諾が得られない可能性が高いのではないかという指摘が出るのです。石川でいこうとしたわけですが、そういうことも受けて、3月にこの件がいったん保留になるのです。どうもいろいろな検討を内部でしていたようですが、書類上は出てきません。

それが1年後の教授会で再浮上して、石川でいきたいという話が再び出ます。当時の学長というのは石坂学長で、それが石川氏のことを非常に高く買うのです。彼はどうも事前の問い合わせをしています。その問い合わせ役はやはり谷友次なのです。彼を通して問い合わせ、石川からは、どうも1～2年の間は軍の都合として離れ難い、要するに、すぐに赴任は難しいのではないかということを経に回答したと石坂学長は言っています。石坂はさらに、「石井部隊長から話をしてもらえば、もうちょっと早く何とかなるのではないかと谷は言うけれども、自分としてはこの問題は本来は文部省を介してやるものだから、そこからしたほうがいいと思う」と言うわけです。わきである石井部隊長からいろいろということではなくて、文部省を通したほうがいいのではないかというわけです。しかし、文部省は本気でやってくれるかどうか疑問だということも口にしています。

です。非常に苦慮するという話が出てきますが、実はこれについては石坂学長には苦い経験があります。1937年、日中戦争が始まったときですが、このときに精神科の教授で早尾帛雄という先生がおられ、当時授業をしていたのです。ところが中支に派遣軍が出るということで、戦線拡大の過程で早尾教授に応召が来てしまったのです。要するに軍医として招集されてしまったのです。精神科の授業をやらなければいけなくて、大事な授業をしている最中に人を持っていかれるわけです。それで、ものすごく怒り、とんでもないことだということで、ねじ込みに行くのです。早尾教授は第1師団に応召されましたが、東京の第1師団まで行って、そんなのは困るとねじ込むのです。そのねじ込みに行く前に、実は文部省へ行って相談しますが、文部省はものすごく非協力的なのです。「そんなことをしたらあなたたちにとって不利になるよ」とまで言い出すのです。かんかんになって帰ってくるという経験がありまして、結局うまくいかなかったのです。

実は早尾教授は軍医として上海へ派遣された部隊について行きます。上海の部隊はそのまま南京攻略に行って、例の南京大虐殺にかかわってくる部隊なのです。彼は南京へは行かず上海にとどまりましたが、上海で日本の軍人がものすごく犯罪を起こすという事態

に対してどう対処したらいいかということで、憲兵隊の相談を受けて報告書を書いています。戦場における精神の問題として、精神科医らしい非常に明快な報告書を書いています。それによると、上海がいかにもめちゃくちゃな状況だったか、軍人がいかにひどいことをしていたかというのが分かります。彼の報告書を見ると、上海でも大虐殺と呼ばれてもおかしくないような事態が起こっていることがよく分かるような報告書なのです。これは軍隊で丸秘扱いにされ、表へ出ませんでした。現在、それは見つかっており、出版もされています。五十年史にも少し載せてありますので、ごらんになると面白いと思います。

とにもかくにも、石坂はそういうこともあって文部省を信用していないのです。ほかにも石坂学長は軍といろいろもめた節がありまして、いろいろな話が残っています。彼は軍隊が嫌いだったようです。そうは言っても、銓衡（せんこう）委員会を立てようということで、石川を第1候補者とするので、この教授会で銓衡委員会を立てました。その結果、2月1日に委員会から、谷あての石川の書簡が来たことが紹介され、1年あれば部隊長の承諾が得られるだろうという見込みが書かれていました。ならば、ということで、さらに短くならないか交渉してみようということが2月の教授会で決まります。その後、うまくいったようで、半年後には石川に辞令が出て、9月に赴任してきます。

この過程でよく分かることは、石川がいかに731部隊で重要な位置にいたかということです。だから簡単には呼べなかった。部隊長の承認とっていますが、それよりも前に軍自体の全体の承認が要るような話だったようです。ですから、いかに重要な位置にいたかというのが非常によく分かる話です。

また、731部隊のパイプ役としても出てきましたが、やはり谷が存在している。どうもつないでいるのは谷しかいないのです。ただし、彼はあくまで731部隊とつながりがあったとしても、軍部そのものとはつながっていないようです。石井との個人関係であり、軍部全体とのつながりは持っていない節があります。それは後々よく分かります。それは実は石川が赴任するに当たって、金沢医大として、石川に対して軍部とのパイプ役を期待している発言が出てくるのです。

それは特にどこで出てくるかというと、当時、戦局が悪化しています。それに伴って軍部のほうで一発逆転のための科学力に期待をかけ、戦争に協力するような研究員に膨大な資金をつぎ込もうと言ってくるわけです。1943年に「戦力増強に関する研究」に従事せよという要求を各医学関係に出し、金を出すよというわけです。金沢医大でもこれにこたえて、科学研究動員委員会というものを作り、軍部の要請にこたえようとしています。その委員

会で、赴任前から石川に期待する発言が表明されているのです。「石川君が来たら軍とのつながりがよくなるかもしれない、いろいろなことが分かるかもしれない」というわけです。石川が来るまで、医大には軍とうまくつなげる人間がいなかった節があるのです。

彼は赴任早々に上京して、軍部とすぐに接触します。10月4日の委員会で報告し、軍医学校の側が軍陣学というのを開講すると。要するに金沢医科大に開講してあげるというわけです。軍陣ですから、戦争の陣中で行う医学のための教育をしようというわけです。例えば緊急手術などなのかなという気がしていますが、よく分かりません。月に1回講師を派遣しますということを提案してきます。そのときの提案に条件があるのです。台湾・朝鮮・中国人は排除してくれと。この授業は受けられないという条件で派遣するけれども、どうかと言ってきて、実施が決定されています。

先ほども石井の講演について、台湾・朝鮮・中国の人たちを排除しました。その一つの理由として考えるのは、彼らは医学を教わるために来ているわけですが、彼らがもし中国に戻って軍とかかわったときに、彼らが陣中で必要となるような知識を持ってもらっては困るという発想があったのかもしれないと一応思っています。といっても、朝鮮も入っている。朝鮮人は非常に危険分子だと考えていたという節はありますが、それもちょっと変な感じがします。これもなかなかいい解答にならないなと思って、実のところ苦慮していますが、ここに関しては、多分、台湾・朝鮮・中国人を排除するというのは、彼らに戦争に関係する特別な技術のようなものを教えたくないという発想があったのだろうと解釈してもいいと思います。朝鮮人もやはり信用していませんからと考えればいいのだろうとは思いますが。ただ、石井のそれに関して言うと、そこまで言ってもいいのかなという気がちょっと残っています。

それで実は、先ほどの石井の講義についてちょっと話を戻しますが、以前に石井の講義についての論文を書いた後で、北陸中日新聞から取材がありまして、記者さんにいろいろ話をして記事になったのです。何年か前の8月15日に記事になりましたが、その記事を見たある方から北陸中日の編集部あてに手紙が来ました。その方は匿名でしたが、この石井の講義に出ていたというのです。その方の手紙にはびっくりする中身がありました。実は映画の中で中国人が実際に殺されるシーンが入っていたというのです。それにはちょっとどきっとしましたが、ただ、これは匿名なので、資料として使えないのです。分かっているならば、資料上に名前を載せなくても提示できる条件さえあればこちらで何とかできますが、使えないのです。この事実関係の確認が取れば、石井に関してはその可能性はあると思

います。中国人が殺害されるところを中国人が見るとするのは当然避けたいですね。また、台湾人は中国の関係の人間です。元は民族的にイコールの場合が多い。朝鮮人にしてみても日本人とは異民族ですから、彼らがそういうものに思いをはせる可能性はあるわけです。ですから、この映画のシーンによる可能性は持っていますが、残念ながら確証が取れていません。今のところまだペンディングのままですが、もうちょっとどこかで見つからないかなと考えている最中です。

ともかく、石川はこういう条件のもとで実施が決定した軍陣医学の仲介役をしたということがあります。また、その後もいろいろとつなぎ役をしていて、1944年10月の教授会では、石川が陸海軍の軍医学校の卒業式に出席し、軍から大学に対する希望事項を伝えています。軍のメッセンジャーの役割を果たしているようです。

ついでに言うと、戦争が終わったあと、戦争に関係した人間たちについては適格審査というものを受けて公職追放になる人もいましたが、石川はそういう目には遭っていません。731部隊は秘密になりましたし、放免になっていますから、石川にも問題は起こらなかったわけです。審査書類も残っていますが、その中では全然書かれていません。

おわりに

731部隊を追うときに、金沢はこのように何度も出てきます。その理由については、石川太刀雄の関係もあって、金沢医科大がかなり関与しているのではないかという疑いは前々からけっこう持っていました。ところが、実際に調べてみると、組織的関与の形跡はありませんでした。金沢医科大については、むしろ、軍といろいろけんかしている姿が出てきました。そうすると、何がというと、やはり谷友次の個人的な関係がいちばんきちっと、常に表に出てくるのです。

谷の関係の形跡は、石井と四校で同級だったところにあります。実は731部隊には四校閥というものがあって、実は二木も石川も四校の出身です。さらに幹部として四校出身者はけっこういまして、増田知貞や岡本耕造という中心人物は四校の出なのです。ですから、四校というのがやはり一つのキーワードになるような感じですね。もう少し追ってみたいと思っています。金沢に本部を置いたなどということも、金沢ゆかりの幹部がよく知る土地ということが一時設置の一つの理由かなと思います。東京のようなところから離れた場所、アメリカなどが介入しにくいところという意味もあると思いますが、そういう場所はほかにもあるわけで、先の理由でそうした中から金沢が選ばれた可能性もあると思います。ま

た、石川がいました。彼は今見てもらったようにかなりの重要人物ですから、その接触の可能性もやはり考えてもいいのではないかと考えていますが、この辺はもう少し突き詰めないといけないところです。

最後にもう一つ、金沢にとって731部隊は負の歴史ということになるのだらうと思います。ただ、こういうことを隠さないということは大事なことだと私は考えています。負の歴史を語ると「自虐だ、自虐だ」と言う人たちがいるわけですが、そういうものは本当は批判に当たらないと思っています。やはり反省がないと繰り返される可能性が極めて高いというのが私の思いです。今日はどちらかというと細かな話で学術的な話が多かったわけですが、やはりこういう負の歴史と正面から向き合うことが、同じことを繰り返さないという意味表明なのだらうと私は思っています。私はこちらこそが本当は未来志向なのではないかと個人的にはいつも思っている次第です。

私としては本当はメインの仕事ではないものですから、1回調べた後も継続的にまだ十分にやりきれていません。その途中の話のようなものをこういう形でお話しするのは心苦しい感じはしましたが、それでも何かこういうところからつかんでいただくものがあればありがたいかなということでお話しさせていただいた次第です。

質疑応答

(質問者1) 私としては731部隊の731という数字に何か特別な意味があるのかなと思ってお聞きしたいのですが。

(古畑) これに特別な意味があるとは思っていません。731というのは実は暗号名です。あまり特別な意味が、裏が見えてしまっただけとはいけないのだらうと個人的には思っています。今までいろいろと書かれているものをもう一度チェックしないとその回答ができませんが、一応私はそのように理解しています。

(質問者2) 石川太刀雄さんは戦後アメリカへ行かれたようですが、あれは何をしに行ったのかなと。私の耳に入ったところでは、やはり留学か何かしていた日本から来ていた女性とすごく親密になって、それで石川太刀雄夫人は腹を立てて実家へ帰ったということが耳に入っていますが、何をしにアメリカへ行かれたのでしょうか。

(古畑) それはすぐの時期の話ですか。そうではなくて、もう少し後の話ですか。実は私はそれはよく分かっていないのです。

(質問者 2) 私はまだ子どもでしたから。昭和 20 年代です。

(古畑) 可能性として一つありうるのは、先ほどの細菌戦の関係のいろいろなデータの解説を石川が一手に引き受けたに近い状況なので、それらに関してアメリカ側からアドバイスを求められて行っている可能性はあります。今のような話は実は知りませんでしたので、1 回調べてみます。何か残っている可能性はあるかもしれません。ありがとうございました。

(質問者 3) 三つあります。一つは、石井がたまたま金沢で日本文化講義をやりますが、そのほか、全国的にないのだろうか。二つめは、731 部隊が最後に野間神社に来ています。これは恐らく石川・谷の関係だと思いますが、もう一つ浮かぶのは、瀬島龍三の弟があのかいわいに住んでいるわけです。しかも瀬島龍三というのは関東軍の参謀に入った男です。そのあたりはどうかということです。もう一つは、金沢医大にも科学研究動員委員会が設置されたということですが、ここを詳しく。

(古畑) 日本文化講義をほかでやっているかどうかですが、日本文化講義自体の史料が本当に少ないのです。先ほどもごらんにいれましたけれど、あれも探り出してあそこまで見つけた状況です。少なくとも昭和 15 年以前の講義の中に石井の名前はありません。彼は文部省の講義のリストには入っていないので、各高等教育機関が彼の名前を挙げて、やってくれということは、多分ないのだろうと思います。これはまだ史料が見つかってこなければ分かりませんが、現時点ではないと。可能性も低いと思います。

二つめの、神社へ行った件ですが、これについてはその瀬島龍三の弟がいた話も聞かせてもらいました。可能性はあるかもしれません。特に当時は金沢の町外れであるというのが、できるだけ人々に見つからないという意味で、多分の一つの事情だと思っています。しかし、ほかの場所もありうるわけです。その中であそこが選ばれている可能性としては、それは考えるのではないかと思います。ただ、今のところ確証は持てません。

三つめが科学動員委員会ですが、実は科学動員委員会の史料は若干ありますが、途中で史料がほとんどなくなってしまいました。44年から後、会議を開いたものの史料が十分残っていないくて、何をどうしたのかあまり分かりません。44年、45年というのは、さすがに大学のほうもばたばたで、疎開したり、実際には講義をうまく開けなかったり、会議も十分にうまくいかなかったりということで、史料がその過程でどこかへ行ってしまったということと、実際にうまく開ききれなかったということと両方あるのだらうと思います。故意になくされているのではないだらうとは思っています。ですので、医学部の史料が資料館に全部移りましたので、もう一度調べ直しをする中で、もう少し見つかってくるかもしれないというのが現状です。

(質問者4) 昭和39年に金沢大学医学部を卒業した者で、当時、石川太刀雄丸先生、谷友次先生、戸田正三先生、皆さん大変お元気でおられまして、ずっと講義を聞いていたので、大変感銘深くお伺いしました。その中で、谷先生が、ライフワークは何だという話で、梅毒スピロヘータの純粋培養がライフワークなのだけれども、これがどうもうまくいかないのだという話をお聞きしました。今日の話と結びつきまして、細菌担当の結核・梅毒工作の担当者であったということがよく理解できた次第です。ありがとうございました。

(質問者5) 戦後、中国で生物兵器が地下から出てきて、それと731部隊との関係と、政治犯が人体実験、ここに約3000名と書かれていますが、その辺の事情をもっと詳しくお願いいたします。

(古畑) 中国から生物兵器というのは私は記憶がありませんが、毒ガス兵器が出てきたというのはよくいわれています。毒ガス兵器は731部隊で製造していたということはいわれていまして、実は黒竜江あたりにたくさん沈んでいるといわれています。今でも時々事故が起こっていますので、それはもう明らかにかかわりがあると理解しています。毒ガス兵器開発の過程で、731部隊でノウハウが作られたものが、各工場へ持っていかれて、そこで実際に造られていくという形を取っているとも聞いていますが、ここはさすがに私は専門ではないのであまり細かくは存じていません。

もう一つは人体実験の件ですが、実はマルタには番号がつけられていたといわれています。1回1500番まで番号がついて、それが一度ゼロになって、もう一度1番からついて

1500 番までいったということです。それで大体 3000 人といわれています。

実は現在、中国のほうでは憲兵隊から押収した史料がありまして、憲兵隊の中に特別移送と書いてあるものがあるのです。特別移送とは何かというのを憲兵隊員に問いただしたところ、それが 731 部隊送りであるということが明らかになっています。ですので、特移扱いと書かれた人間は 731 部隊に送られたということが人間として確定できるのです。数年前のデータで 59 名確認できています。実は固有名詞が分かっている関係で、自分の親がこういう形で送られて殺されたということで裁判を起こしているケースが存在しています。そのあと、まだ分かっているはずですので、もうちょっといるはずです。ロシアにも若干史料があると聞いています。

(質問者 6) 谷さんを通して金沢大学医学部の連絡の中で 731 部隊というのが出ているので、当時の医学界では知られていたことではなかったかということですが、そういう部隊の存在自身は秘匿されていたから、そういう関係者がいない大学や分野などでは、そんなに知られてなかったのではないかなという可能性も考えられます。

(古畑) 知られたというラインをどの辺に置くかということだと思います。ただ、教授会では表に出るわけです。その辺を考えると、何をしたかは多分分からないと思いますが、何となく名前としてこういう特殊部隊があったことは知られていたのではないかなと思ってはいます。関係者の全くいない大学では、確かにそういうことは考えられると思います。

(質問者 7) 私は別に医者でも何でもありませんが、三島由紀夫がケンブリッジ大学で日本の美しさについて講演しているはずですが。その原文を見たことはありませんが、新聞の情報などを見ますと、美しき日本、ただし、日本人のバーバリズムには気をつけてくれと三島由紀夫が言っているということです。これはイギリス人から見たバーバリズムです。私は素人ですが、戦争を境に、日本人の転向の思想、簡単に変わってしまうのです。これについて研究書が随分出ているはずで、特に教育大学で随分出ています。僕は 2～3 冊しか読んでいませんが、調べていただければと思います。

(古畑) ありがとうございます。転向の研究というのは、鶴見さんなどのものが存在していて、私も存じています。実はこの五十年史をやっていく過程で、本当にもの見事に

数年の間に雰囲気が変わっていく姿が、きれいに私の頭の中でも描けました。要するに教
学刷新という形で打ち出される中で、本当に数年です。その過程で何がてこになっている
かというと、満州国です。満州熱をてこにしながら、人々の思想状況を変えていく、あお
っていくという姿がある程度見えてきます。五十年史をできるだけそういう姿で描いたつ
もりですので、もしよろしければ通史編を読んでください。

私はその関係もあって、アメリカで今そういう研究をしておられる方のところへ半年ほ
ど研究しに行っていました。その方もそういう考え方で、満州熱のような、人々を一
つの方向に引きつけるものを軸にしながら状況が変わっていくという姿を描き出してくれ
ていますので、割とそういう研究が今進展していると思っています。我々もその辺を頭に
置きながら、今の時代を生きなければいけないのかなと思っている次第です。ありがとう
ございました。